

収穫感謝日、謝恩日って？

細井 茂徳

先週、私たちは子ども祝福式、午後からは教会フェスティバルを開き、教会員のお子さんや教会学校の子どもたちを招いて、神さまの恵みを分かち合いました。その翌日曜日の今日は、教会の暦では1年最後の日曜日です。来週からクリスマスを待ち望む待降節、すなわちアドベントが始まると同時に、教会暦の新しい1年が始まります。日本基督教団ではこの教会暦における1年の最後の日曜日を、「収穫感謝日」および「謝恩日」と定めています。謝恩とは、受けた恩に対する感謝の気持ちを表すことで、巷で聞かれる「謝恩セール」というのも、そのような意味で行われているのでしょうか。教会によっては収穫感謝日の礼拝後に、持ち寄った食べ物を集った方々やこれまでお世話になった人々と共に感謝しながら食したりします。そうして教会の暦における1年最後の主日礼拝に、この年を振り返りつつ、いただいた恵みに思いを馳せ、「感謝」について語られることが多いのです。

日本では奇しくも11月23日が「勤労感謝の日」の祝日とされています。「勤労感謝の日」について法律では、「勤労を尊び、生産を祝い、国民が互いに感謝し合う」日として意義付けられています。が、実際には法律で謳われているのとは大分かけ離れた過ごし方がなされているように思います。しかしアメリカでは、毎年11月の第4木曜日を収穫感謝祭(Thanksgiving Day)の祝日(今年は11/27)に定め、みな一斉に帰省して家族団欒で過ごすほど、非常に重要な日とされているのです。

「勤労感謝の日」も「収穫感謝祭」も、いずれも秋に祝われ感謝することにおいては共通しているのですけれども、「勤労感謝の日」は心身を通して労をなしてくれた人たちに対して感謝する日とされる一方、「収穫感謝祭」は神さまに対して感謝をささげ、恵みを他者と分かち合う日とされているのです。いずれにしても感謝する思いでは同じなのですが、誰に対して感謝するのかが明らかに違っているのです。